

行ク、貴人ノ時ハ、末坐手燭ヲ持テ先ヘ立、

〔茶之湯六宗匠傳記〕三古田織部殿自筆の寫

一中立に腰かけへ出たる時、腰かけの角に圓座有、上座より段々取て我居る所に敷上へあがり、とくところくに在る也、腰をかけているは無禮なり、

〔細川茶湯之書〕下一中立して用有ものは、外へ出て用をかなへ、又雪隠へも行なり、

一雪隠へ行に二つ有せつちんなれば、外のせつちんへ行べし、一つ有ば猶又外の雪隠を尋餘所へも行べし、袴は外の腰かけにてぬぎ、又きて内の腰懸へもどるべし、

一雪隠に居時、私に云、先下に紙をたくさん、にちらし、上に居て又紙を敷かくし、其上に砂を置なり、

一腰懸にて長咄いや也、はなせばたちばを忘、座敷へおそし、手水をつかひ座敷の左右を待べし、座敷の左右とは、昔は座敷仕舞て、箏の音が左右なり、近年は鐘をた、く也、此二左右次第に座敷に入べし、夏の敷奇におそくはいる惡し、水かはひて石共惡し、又花入水指水かはく也、

〔南方錄〕三亭主後坐を設る事

客中立の跡、敷奇屋の内掃除し、一座陽に心得べし、掛物を巻花を生、簾をはづし、突上をも明ル、敷もかねて陽を用ユ、

床掛物卷、花入、釜、水指、茶入、茶盆、茶巾、茶釜、茶杓

如是の時、棚に羽帚、掃置には、敷を考へてはづしに置べし、はづしかね口傳器の三ツ組、水指、小ぶりを用る事、つゞきのかね、秘事口傳、掛物に寄、其儘かけながし、別に薄板も花入置て花を生る、又は掛物卷て、薄板の事も有、配合の品と一ツ物等、委敷書付がたし、師傳可聞、

〔茶道織有傳〕下炭茶の手前の大體